

ベル『そして何もいわなかった』試論  
— 住みえない世界から住みうる世界への転換点 —

木本 伸

現在、ベル研究は大きな転換期を迎えている。今世紀に入り従軍中の彼の書簡集<sup>1)</sup>が刊行され、初めての歴史批判版全集<sup>2)</sup>も刊行中である。これらに依拠した研究も数多く発表されている。その一方で戦後文学の代表者であったベルに対する一般的関心の低下も否定できない。ベルは同時代の社会事象から目を逸らすことのない作家だった。しかし、その作品の舞台であった社会は急速に姿を変えている。それにつれて彼の作品は現在の読者に訴える力を失いつつあるようだ。それはベルのように時代とともに歩んできた作家にとって、再受容において一度はくぐらねばならない試練といえるだろう。<sup>3)</sup>それでは作品の再受容を可能にする条件とは何だろうか。文学が素材とする風俗や慣習は必ず過去のものとなる。そのとき作品にさらなる生をもたらすのは作家が見据えていた射程の長さだろう。<sup>4)</sup>もしもベルの視線が近代を貫く人間の問題を捉えていたとしたら、彼の作品を読み解くことには今なお意義があるはずだ。現在ベル研究に求められているのは、こうした方向での作品の検証だろう。

こうしたことを考える上で『そして何もいわなかった』(1953)は格好の作品である。この作品は発表当時、時事的な「住宅問題」の小説として受けとられるとともに「戦後文学の傑作」という高い評価も得ていた。<sup>5)</sup>この二種類の評価は実は矛盾しない。そもそもベルにとって「住む」ということは、人間と社会を考えるうえで鍵となる概念だった。『フランクフルト講義』(1966)で彼は戦後ドイツ文学では住みうる場所がひとつも描かれておらず、そこで「地位と名声を得た唯一の街が失われた都市(eine verlorene Stadt)ダンツィヒであることは偶然ではない」<sup>6)</sup>と述べている。この住みえない世界において住みうる場所(言葉)を確保することが彼の文学的使命だった。<sup>7)</sup>

この作品の主人公には安んじて身を落ち着ける場所がない。それはルカーチが近代文学の特徴とした「先験的な故郷喪失」(die transzendente Obdachlosigkeit)<sup>8)</sup>の戦後ドイツにおける形象に他ならない。ここで作家は故

郷を失くした人間の現実を直視しつつ故郷を回復する道を模索している。それは近代化の延長上にある私たちにとって、なおも検討に値する試みではないだろうか。

## 作品の構造

作品の主人公はフレートとケーテの夫婦である。二人には三人の子供があり、さらに死別した双子の子供がいた。二人は二ヵ月前から別居している。住まいのあまりの狭さに耐えられなくなったフレートが理不尽にも子供たちを殴るようになり、家を飛び出したのだ。それ以来彼は教会の事務所で電話交換手として働きながら、夜は友人の家や駅の荷物保管所を転々としている。そして時折金を工面しては安ホテルに妻を呼び出す。そんな日々の中でも彼は子供たちのことを思い続けている。そして子供たちも母親に父親のことをたえまなくたずね、たまに会えると無邪気に喜ぶのだ。物語は九月のある土曜日、仕事を終えたフレートが週決めの賃金をもらう場面から始まる。そして、さびれたホテルでの二人の逢引きと別れ、仕事が始まる月曜の朝までが描かれている。

作品の色合いを決定しているのは愛し合う者たちの引き裂かれた痛みである。このことはテキストの構成にも反映されている。全十三章からなるテキストは一貫して奇数章がフレート、偶数章がケーテを一人称話者として構成されている。二つの語り視点から生活の苦しさや愛するものへの思いが交互に語られることで、本来ともにあるべき家族の分裂が明瞭に示されるのだ。その際、より引き裂かれた状態にあるのは夫のフレートである。たしかに家に残されたケーテはフレート以上に生活の厳しさに直面している。彼女は家を逃れて街を漂うように生きる夫をなじり、「一年もすれば、もしかしたら私も子供たちを殴るようになるかもしれない」(123)と語る。しかし夫の帰りを待ち続ける彼女は、現実を受けとめる聖母のような存在である。この彼女の存在がフレートの現実受容のあり方をおのずと変えていく。このテキストから作成されたラジオドラマ『いつものような一日』(Ein Tag wie sonst)(1953)<sup>9)</sup>が、最終的に『妻との出会い』(Ich begegne meiner Frau)という表題で放送されたことは、<sup>10)</sup>この点で示唆的である。フレートは新しい目で妻を発見し、そのことによって彼自身も現実を受け入れていくのだ。テキストはフレートの独白から始まり(第一章)、彼が家に帰ることを決

意する場面で終わっている（第十三章）。その意味で、これは住むべき世界を失くしたフレートが住みうる世界を発見するまでの物語だといえるだろう。

### ケーテ，貧しさの苦しみ

二人が別居を強いられる直接の理由は住まいの狭さだ。古びた家屋の間借りでは隣室のささやきや「ガスコンロの炎の音」(45)までも聞こえてくる。さらに部屋の壁はもろくなり「部屋のすべてに埃がたまっている」(46)。ケーテの日常は「埃との戦い」(45)だ。清潔さを保とうとする主婦の努力は、ここでは希望のない無限の労苦をなしている。このような主婦の日常を作家は次のように描き出している。

初めの一平方メートルをきれいにしようとすると、すぐに雑巾を洗いすすがねばならなくなる。そして澄んでいたバケツの水には、もうミルク色の濁りが広がっている。三平方メートルをきれいにすると水は重々しく澱んでしまい、バケツを空にすると底には不愉快な石灰のおりもの残り、私はそれを手で掻き出して洗い流す。そしてまた私はバケツを水で満たさねばならない。(…)しかし、あふれそうなバケツの水音が私を追憶から汚れとの戦いへと引きもどす。そしていつものようにバケツを揺らしながら床に置くと、さっき拭き取ったばかりのところがもう乾いて、そこにはどうしようもない石灰の白い膜ができている。この胸を悪くするような染みが根絶できないことは、わかっている。この白い虚無は私の意志を打ち砕き、私を無力にしてしまう。

さらに薄い戸をへだてて彼女は埃を吸い込む子供の咳を耳にする。その声は彼女に死んだ双子の記憶を呼び起こす。南京虫や虱に刺されて膨れ上がった幼い者たちの姿が彼女の脳裏に蘇るのだ。それは彼女に「体の痛みのような絶望」(die Verzweiflung wie einen körperlichen Schmerz)(46)をもたらす。この絶望の直接性は、いずれは身体が埃となり滅ぶという人間の本来的事実に由来するものだろう。

このような劣悪な住宅環境は微視的には戦後ドイツの一時期を特徴付けるものだった。しかしケーテの日常は、巨視的には人類史を一貫する労働の原型に属

しているのではないだろうか。人間は自然から素材を取り出して住まいや文明を造り出す。しかし自然は時間をかけて人間世界を崩し取り、ふたたび自己のうちに取り戻そうとする。その意味で、ここには太古からの人間と自然との関係が描かれているのだ。このような人間と自然との関係は古来から「ヘラクレスの馬小屋掃除」などの神話的形像において伝えられてきた。しかし家屋を保つための労働はヘラクレス的な英雄行為ではない。それは実際には苦勞の多い奴隸的作業である。ハンナ・アレントによれば、このように「人間の工作物の中に繰り返し侵入し、世界の耐久性を脅かし、世界を人間の使用に耐えないものにしようとする（自然との）終りなき闘い」は苦痛に満ちている。それは、この闘いが「情容赦なく反復しなければならぬものだから」<sup>11)</sup>だ。このような労働は古代においては奴隸の業であり、近代以降は家庭の主婦など主に女性によって担われてきた。その意味でケーテの姿には古代からの労働のイメージが重ね合わされているといえるだろう。

ケーテは快適な住まいに憧れている。しかし彼女の現実認識は冷めている。広い住まいは結婚生活を可能にしても、それによって「幸せになれるわけではない」(22)からだ。ケーテの苦しみは直接的である。それゆえに彼女は現実を受容する聖母のような存在となるのである。<sup>12)</sup>

### フレート、貧しさの意識

ケーテに示される直接的な痛みは人間の苦しみの一部にすぎない。そこから作り出される惨めさの意識によって人間は苦しみを倍化させていく。このような意識の問題は家を逃れて街をさまようフレートに体現されている。友人のもとに「庇護」(Asyle)(23)を求めても、そこは安住の地とはならない。脳裏に焼きついた貧しさの意識が彼自身を追い立てるからだ。

何の味も手触りもない白い埃のように、俺たちが十年前から呼吸している貧しさ——この目に見えず言葉にもできない、しかし厳としてここにある貧しさの埃が俺の肺と俺の心臓と俺の脳髄に染み付き、俺の身体の循環を規定し、息もできなくしたのだ。(56)

このように身体に溶け込んだ意識は本人によって対象化されることはない。それはむしろ暗い情念となって、その人の周囲を重苦しく染め上げていく。フレートが街をさまようテクストの前半は、このような情念の色で染められている。まず仕事を終えて入ったソーセージの屋台で彼は鏡に映った自分の姿を見ておどろく。それは他人のものならばぎょっとするような「黄色い歯並びの奥にあいた暗いのどの穴」(8)だった。その後、この「昼間に飲み込んだソーセージは吐き気をもたらす」(14)。この吐き気は現実を受容できない彼自身の自己分裂を暗示しているのだろう。

貧しさは外から降りかかる不幸のひとつだ。この不幸を内面化することで、人間は「まるでピンで留められた蝶のように」<sup>13)</sup>身動きを失う。このような意識のからくりを洞察した人にシモーヌ・ヴェイユがいる。

不幸は人をかたくなにし、絶望させる。不幸はたましいの奥深くに灼熱した鉄で烙印を押すように自己自身へのさげすみと、嫌悪と、反発と、罪悪感と、汚辱感とを刻みつけるからである。(…) こういうさげすみ、反発、憎しみが不幸な人に宿ると、それらは、その人自身に戻ってきて、たましいの中心に染み込み、そして世界全体をその有毒な色彩で染め上げてしまう。<sup>14)</sup>

ケーテによればフレートは病気である。それは「ベットに横たわる必要のない病気」(171)であり、フレート自身も「貧しさが俺を病気にしたのだ」(123)と告白する。不幸な人はだれに強いられることもなく自分を蔑み、苦しみを深めていく。ヴェイユによれば、こうした自己否定の渦に引き込まれることは人間にとって不可避である。ただイエスだけが十字架という最大の不幸においても真実にとどまることができたと、彼女はいう。それゆえにイエスとの出会いによって、不幸な人は自己否定という不真実からひるがえされるのである。この物語でも『そして何もいわなかった』という表題において十字架のイエスの沈黙が強く暗示されている。ケーテは家事の苦しみの中で「彼らは彼を十字架に釘付けた…そして彼は何もいわなかった」(50)という黒人女性の歌声を何度も思い出す。それは虐げられた黒人の歴史の底を流れる祈りの声でもあるだろう。しかしフレートの不幸は宗教的契機によって即座に解決されるほど単純ではない。それは戦後ドイツ

の経済成長という社会構造と絡み合っているからだ。

### 経済成長（清潔な社会）

このテキストは金銭を扱う場面であふれている。第一章はフレートが給料を受け取る場面、第二章は夫が送金した生活費を数えるケーテの独白で始まる。最終章も銀行に送り出されたフレートが事務所に戻ったところで閉じられる。この他にもホテルの代金を工面するために彼が友人や上司に無心するところなど、ほとんど全編で金銭のやり取りが描かれている。

その際、奇妙な印象を与えるのは経済的に優位に立つ人々のある種の清潔さである。例えばフレートの給料は「給与カード」(5)と事務的な「オーケー」(5)だけで処理される。その様子は「会計係の清潔な手が大理石の台の上で紙幣を数えていた」(5)と描写されている。またフレートの上司である神父も「非の打ちどころのない襟の白さ(die tadellose Weiße seines Kragens)や僧衣からのぞく完璧な紫色の縁が彼と話し合うことを思いとどまらせてしまう」(180)。さらにケーテと同じアパートで三部屋を占有する「 فرانケ婦人は六十歳でなお美しく、彼女の目の奇妙な輝きはすべてのひとを魅了するのだが、私[ケーテ]には恐怖を与える」(22)という。フランケ婦人の高価な家具には「毎週八時間もの掃除婦の汗がついやされており(…)その死を思わせるような清潔さは、私[ケーテ]を不安にする」(24f.)。この初老の女性はトイレの衛生状態にも敏感である。ケーテの子供たちが共同トイレを使うと彼女は自分の部屋から飛び出してきて、わずかな染みを探すのだ。

白い襟、美しいトイレ、大理石の上の紙幣。こうしたものは無菌状態の清潔さを思わせる。その特徴は生命感の欠如だ。ケーテがフランケ婦人の家具を「死を思わせるような清潔さ」(diese ganz tödliche Sauberkeit)と形容するのは、その意味で正確である。この生命感の欠如は経済成長の原理である人間の記号化と無関係ではない。<sup>15)</sup>経済社会では人間は消費者や労働者として特定の機能へと平準化されていく。このように記号化することで人間は貨幣のように容易に流通するのだ。記号化した存在には生活の汗の匂いがない。そこにあるのは匂いのないマネキンの美しさである。マネキンは幸福な未来が待つかのように憂いのない視線で人々を進歩へと誘う。それはフレートの目には「人形の偽りの楽天性」(die

Puppen mit ihrem falschen Optimismus)(30)に他ならない。経済社会の基本的性格のひとつはこの楽天性にあるといえるだろう。朝のラジオは「お役所めいた明朗さ」(diese amtliche Heiterkeit)(172)で労働者を家庭から送りだす。それは記号の憂いなさとも通じている。経済社会は内実の空虚を隠すように、進歩の名のもとに自己拡大を続けていくのである。

フレートは社会の虚偽を見抜いている。それゆえに彼には行き場がない。仕事に打ち込み経済成長に寄与することで生きがいを得ることは、彼にはできない。彼は「俺は何を始めてもすべてがつまらなく退屈で無意味にしか思えない」(109)と独白する。その横顔は「空虚に蝕まれて」(leergefressen)(48)いる。それは「他の男たちが真剣に受け取ろうと心に決めたすべてのことに早くから白けてしまった男の顔」(48)である。惨めさや無力感に打ちのめされて、彼は逃げ場のない「死の循環」(in den tödlichen Kreislauf)(12)へと飲み込まれていくのである。<sup>16)</sup>

## 場末の聖家族

フレートには住みうる場所がない。彼が落ち着ける場所は墓地だけだ。彼は時間を見つけては近くの墓地へと足を運ぶ。そして知らない人の葬儀に参列して遺族と飲み交わし、また街にもどっていく。生産性を追求する社会では死者は無用の存在である。しかしまた死は人間が虚飾を捨てて、最後に帰するところでもある。そこに彼は自分が受け入れられる最後の場所を見出すのだ。しかし死者の慰めだけでは人間が社会的に再生するには不十分だろう。私たちの主人公が家族という生活の場にもどるには、死者のように無用にして、しかも命ある場との出遇いが不可欠だった。ここで作者はある家族を登場させる。

日曜の早朝、駅の荷物保管所で一泊したフレートは小さな教会で一人の少女を見つける。そして少女の後をつけて彼女が営む場末の屋台にたどりつく。そこは彼も足を踏み入れたことのない、さびれた区域だった。その屋台の朝食にフレートは不思議な感動をおぼえる。ベルにとって食事は人間関係の象徴である。そまつな食事が深い愛情の表現でありうるように、豪華な食事も落ち着ける場所であれば美味しいと感じることはできないからだ。フレートとケーテはそれぞれにこの屋台にたどりつき、とりわけ少女が入れるコーヒーに感動する。生きること

に絶望した人もタバコやコーヒーを口にするとき、もう一度生きることを決意するのだとベルはいう。<sup>17)</sup>彼の作品において無用の嗜好品は愛情のように目には見えない、しかし、それなしには生きることが成り立たないような何かを表現しているのだ。

この屋台での経験からフレートは家族の意味を再確認する。その夜、結婚の理由を問われて、彼は「生涯朝食をともにする人を探していたのだ」(143)と答える。彼にとって妻とは「大いなる朝食の同伴者」(eine großartige Frühstückspartnerin)(143)だった。もしも食べることが喜びであるならば、そこには生きることの喜びがある。その意味で住みうる場所とは、食べることが喜びであるような場所だといえるだろう。

フレートは少女の美しさやコーヒーの香りにひかれて店を去りがたくなる。しかし彼はまだ彼女の存在を十分に受けとめてはいない。少女は貧しく清楚だ。おそらく華やかな街路では、彼女は人目を惹くことはないだろう。その美しさは彼女の存在のあり方に由来している。このさびれた店においてそれを示唆するのは少女の家族だ。彼女はいつも知的障害者の弟をともなっている。この少年は口元から涎をたらし zu-za-ze(98)という意味不明の音をつぶやいている。また二人の父親は傷痍軍人であり何をすることもなく店にいる。少女の美しさは、この家族の存在と不可分である。しかしフレートは少年に「いらだち」(36)をおぼえる。彼が席を立ったのも、ふたたび少年の姿が目にとまったときだった。それはマネキンの美しさの対極に位置するものであり、彼に貧しさの意識を呼び起こすのだ。

ケーテもまたフレートに呼び出された安ホテルへの途上で、この屋台に行きつく。しかし彼女は少年を違和感なく受けとめる。「たいていの人はこの子に吐き気をもよおす」という少女に、ケーテは少年を「まるで赤ん坊のようだ」(wie ein Säugling)(97)と表現して少女を喜ばせる。赤ん坊とは世界にさらされ世界を無条件に受け入れている存在だろう。少年はまるで泳ぐように空気の中をゆっくりと歩く。彼が口に作る「かならずZで始まる、どこかにメロディを隠しているような言葉の断片」(40)は、社会的な意味付け以前の本来的世界を示すかのようだ。世界をありのままに受け入れるその姿には受難のキリストが重ね合わされているのではないだろうか。ケーテは貧しさに傷つき苦しんでいる。それゆえに彼女は少年の平和な姿に無媒介に打たれるのだ。その後ケーテとフレートはホテルで

一夜をすごし、ふたたびこの屋台で朝食をともにする。この聖家族を思わせる一家との交流によって、二人は存在の本来的なあり方を学んだのである。<sup>18)</sup>

## 受け入れられている自己

ホテルの部屋でケーテは家にもどるか、それとも別れるのか夫に選択を迫る。そして広い住まいを得るために働くという夫に「住まいなんかは全然問題じゃない、ほんとうに、そんなことが大事だと思っているの」(152)と問い返す。二人は社会的現実をこえようともがいている。その方法は祈りだ。物語の中で二人はたびたび教会を訪れる。それは異世界への逃走ではない。ケーテによれば「祈りは力をもたらすただひとつのこと」(154)であり、フレートにとってもそれは「一緒に寝ること以上に人間を結びつけるもの」(183)だった。ベルの文学を考える上で「愛と宗教」<sup>19)</sup>は鍵をなす概念である。宗教性を秘めた愛には現実に然りをいう力があるからだ。このような愛に立ち返る場が祈りだといえるだろう。

祈りの力が具体的に示されるところがある。それは物語の最後にフレートが家にもどることを決意する場面である。妻と朝食をともにして職場に向かったフレートは上司に銀行に行くように依頼されて街に出る。そこで彼は通りの向こうに妻を見つける。彼女は祈りの中で死んだ二人の子供のことをよく思い出していた。この子供たちに花束を手向けるために彼女は出かけたのだ。ケーテの手にある花を見て、フレートもその意味を察して後を追う。

ケーテによれば、この子供たちは一度も野原で遊んだことがなかった。彼らが人生の過酷さにさらされずにすんだことに慰めを覚えつつも、彼女は野原で遊ぶ子供たちの姿を何度も夢に見る。そして野に咲く花だけを墓に手向ける。<sup>20)</sup>野原では、すべてのものがそのままに受け入れられている。それは生産性や効率性で存在を差別化する経済社会の虚構性を映し出す、より本来的な場を象徴しているのだ。この野原のイメージは十字架のイエスの沈黙へと続いている。プロテスタントの神学者ティリッヒによれば、十字架という「絶望と意味喪失の暗黒の中に見捨てられたとき」、それでもイエスが「彼の神」として見出したのは、あらゆる存在者をあらしめる「存在の力」だった。<sup>21)</sup>この発見は特殊な出来事ではない。なぜなら「すべて存在しているものは、存在の力に参与している」<sup>22)</sup>からだ。同様に「懐疑と不安」にさらされた現代人の最後の寄る辺は「受け入れ

られている自己を受け入れる勇気」(the courage to accept acceptance)<sup>23)</sup>だとティリッヒはいう。この物語の主人公たちにとって祈りとは、このような本来的な存在の世界へと立ち帰る通路だといえるだろう。

「緑の帽子」と「緑のスカート」を身につけたケーテは「緑の通り」(182f.)へと歩いて行く。そして花を手にしたまま人気のない真昼の教会を訪れる。このとき街路は売り子の呼び声や百貨店の宣伝であふれている。それは彼女の宗教的回心が社会的現実の直中で起こることを意味している。彼女が教会から出てきたとき、その姿にフレートはつねならぬ何かを認める。これまで彼は妻を「何度も抱くだけで、ほんとうに知ることはなかった」(185)ことに気づいたのだ。ラジオドラマ『いつものような一日』では、このとき主人公の夫は「これまで俺は死んでいたのではないか、いま初めて生に目覚めたのではないか」<sup>24)</sup>と独白する。それは死のような社会的現実の中での復活を意味しているのだろう。ケーテの「悲しくもやさしい横顔」(185)は、わが子の死を受けとめる聖母マリアのようだ。この妻の姿に気づいたとき、フレートは受け入れられていた自己に初めて気づいた。それは住みえない世界における住みうる世界の発見だった。その後、彼は上司の神父に家にもどるといふ決心を伝える。<sup>25)</sup>

父親がもどった一家でも経済的な苦勞がたえることはないだろう。しかし経済社会の無意味性が、もはや彼らの生を蝕むことはありえない。主人公たちは本来的な存在の根拠を見つけたからだ。それは特別な事件ではなく「いつものような一日」の出来事だった。『そして何もいわなかった』で作家ベルは経済社会における人間存在の危機と取り組んだ。そこで彼が見出した方向性は人間が様々な尺度で価値付けられる現在において、なおも有効な示唆を与えているのではないだろうか。

---

本論は日本独文学会春季研究発表会(2007年6月10日、東京大学)および日本独文学会中国四国支部研究発表会(2007年11月10日、徳島大学)で口頭発表した内容に加筆訂正したものである。使用するテキストは次のとおり。Heinrich Böll: *Und sagte kein einziges Wort*, München (dtv) 1980. 引用後の括弧内は頁数を示す。

<sup>1</sup> Heinrich Böll: *Briefe aus dem Krieg*. 2 Bd. Köln (Kiepenheuer u. Witsch) 2002.

<sup>2</sup> Heinrich Böll: *Werke*. Kölner Ausgabe. Köln (Kiepenheuer u. Witsch) 2002ff. なお *Und sagte kein einziges Wort* を所収予定の第6巻は本論の執筆段階では公刊されていない。

<sup>3</sup> ベルに対する一般的関心の低下、換言すれば彼が「過去の忘れられたノーベル文学賞受賞者たちと同じ運命をたどるのか、それとも文学的生命を保持するのか」という問題は、ベル研究の共通関心となりつつある。Vgl. Georg Langenhorst: *Zur Aktualität Heinrich Bölls*. In: *30 Jahre Nobelpreis Heinrich Böll. Zur literarisch-theologischen Wirkkraft*

---

Heinrich Bölls. Hrsg. von Langenhorst. Münster (LIT) 2002. S.7f.

<sup>4</sup> ベルは彼の文学が同時代の事象を素材としながらも、それを透視しつつ神学的視点から近代の問題と取り組むものであることを強く意識していた。次の彼の発言はそれを明瞭に示している。「戦争やナチスがなかったとしても、私は《そして何もいわなかった》をほとんど同じように書いていたと確信しています。(…) わずかな同時代の細部は別としても、私にはこの小説が異なる結末を迎えたとは考えられないのです。私たちは作家が根本的に形成され、自ら目標として設定した地点まで遡るべきでしょう。(…)唯一重要であるのは、つねに一貫して現前する、こういってよければ神話的神学的問題

(mythologisch-theologische Problematik)なのです。」 Vgl. Heinrich Böll: Eine deutsche Erinnerung. Interview mit Rene Wintzen. Köln (Kiepenheuer u. Witsch) 1979. S.22f.

<sup>5</sup> ハンス・ヴェルナー・リヒターは「戦後に書かれた最良の一冊」(das beste Buch, das in der Nachkriegszeit geschrieben worden ist)と述べ、ゴットフリート・ベンも手紙で「すごくいい、とてもカトリック的！」(ganz gut, sehr katholisch!)という評言を残しているという。Vgl. Werner Bellmann: Der Engel schwieg / Und sagte kein einziges Wort. In: Interpretation Heinrich Böll. Stuttgart (Reclam) 2000. S.82-108. Hier S.106. なお『そして何もいわなかった』発表当時にベルがおかれていた社会的文学的状况については次のものが詳しい。Heinrich Vormweg: Der andere Deutsche. Heinrich Böll. Eine Biographie. Köln (Kiepenheuer u. Witsch) 2002. Der 3. Teil. Die Abenteuer des Schriftstellers. S.175-248. Besonders S.180ff.

<sup>6</sup> Heinrich Böll: Frankfurter Vorlesungen. In: Werke. A.a.O. Bd.14. 2002. S.162.

<sup>7</sup> 『フランクフルト講義』における次の発言を参照のこと。「現実と呼べるのは、この〈住むことができない〉(Nicht-wohnen-Können)というドイツ人の事実です。(…)統計上はすべてのひとが、どこかに、何らかの形で住んでいるのですが(浮浪者さえも登録されています)、どうやら、だれもがいつもどこかへ跳びまわっているのですから。いかなる場所でも、隣人関係は持続性を持ち信頼を呼び覚ますものとして描かれてはいません。(…)戦後文学では、住まいはただ失われた住まいとして描かれています。現存する住居は、たんにその場限りのものとして描かれています。」「新しい世代は、この国が文学においても住みうるものとなるように根本的に検討しなければなりません。」 Heinrich Böll:

Frankfurter Vorlesungen. A.a.O. S.161. u. S.163. 次の論文も参照のこと。Werner Weber: Die Suche nach einer bewohnbaren Sprache. In: In Sachen Böll. Hrsg. von Marcel Reich-Ranicki. Köln (Kiepenheuer u. Witsch) 1968. S.72-80. Besonders S.72f.

<sup>8</sup> ジェルジ・ルカーチ(原田義人訳):小説の理論(筑摩書房)1994, 29頁。

<sup>9</sup> Heinrich Böll: Ein Tag wie sonst, Hörspiel. 2. Auflage. München (dtv) 1982, S.39-60.

<sup>10</sup> Vgl. Werner Bellmann: Das Werk Heinrich Bölls. Biographie mit Studien zum Frühwerk. Hrsg. von Werner Bellmann. Opladen (Westdeutscher Verlag) 1995. S.137.

<sup>11</sup> ハンナ・アレント(志水速雄訳):人間の条件(筑摩書房)1994, 155-156頁。

<sup>12</sup> ここにはベルがカトリックの作家レオン・ブロイに学んだ逆転の発想が認められる。ベルにとって貧しさは神が宿る唯一の場所だった。『若き日のパン』のヴァルター、『アイルランド日記』で紹介される市井の人々、『道化の意見』のハンス、『女のいる群像』のレニなど、これは彼の文学に通底する視点といえるだろう。Vgl. dazu Heinrich Böll: Leon Bloy. In: Werke. A.a.O. Bd.7. 2007. S.18f.

<sup>13</sup> シモーヌ・ヴェイユ(田辺保・杉山毅訳):神を待ちのぞむ(勁草書房)1987, 126頁。

<sup>14</sup> 上掲書 107-108頁。

<sup>15</sup> Heinrich Herlynは、この作品における「清潔さ」(Sauberkeit)や「こざれいさ」(Ordentlichkeit)などのモラルは経済社会に特有のものであり「隣人関係の無情な断絶」を意味していると指摘している。Vgl. Derselbe: Heinrich Böll als utopischer Schriftsteller. Bern (Peter Lang) 1996. S.157ff. 同様の社会分析を展開したものとして次のものも参照のこと。エーリヒ・フロム(作田啓一・佐野哲郎訳):希望の革命、技術の人間化をめざして(紀伊国屋書店)1969, 第三章第三節「現在の技術社会」60-94頁。

<sup>16</sup> この作品の功績を「精神的荒廃と経済復興の同居状態」(das Nebeneinander von seelischer Verwüstung und wirtschaftlichem Aufbau)の描写に認めた同時代の評価は、現在も妥当性を有しているのではないだろうか。Vgl. Karl Ludwig Schneider: Die Werbeslogans in dem Roman „Und sagte kein einziges Wort.“ In: In Sachen Böll. A.a.O.

---

S.238-244. Hier S.244.

<sup>17</sup> 『フランクフルト講義』では次のように述べられている。「アドルノが〈アウシュビッツの後では、もはや詩を書くことはできない〉という偉大な言葉を述べたのは、この街でした。私はこの言葉を言い換えてみたいと思います。アウシュビッツの後では、もはや息をすることも、食べることも、愛することも、読むこともできないと。—しかし最初の一息をついた人、一本のタバコを口にした人は、生き残ることを決意したのです。読むこと、書くこと、食べること、愛することを決意したのです。そんな生き残りの一人として、私はみなさんに語りかけています。」 Heinrich Böll: *Frankfurter Vorlesungen*. A.a.O. S.150.

<sup>18</sup> 『そして何もいわなかった』は執筆段階では『屋台』(Imbißstube)という表題を与えられていた。この場面の重要性を示唆する逸話である。この作中の屋台は「ベルにとっての真実の教会」(eine im Böllschen Sinne wahre Kirche)を意味しているという指摘は正しいだろう。Vgl. Lawrence F. Glatz: *Heinrich Böll als Moralist. Funktion von Verbrechen und Gewalt in seinen Prosawerken*. New York (Peterlang) 1999. S.122.

<sup>19</sup> 「ベルの人間性の美学において、愛と宗教は決定的な意味をもつものである。」 Vgl. Heinrich Jürgenbehning: *Bölls Entwurf einer Gegengesellschaft*. In: *30 Jahre Nobelpreis Heinrich Böll*. A.a.O. S.167-184. Hier S.171. ただしベルにとって宗教とは「人間存在がすでに神を証明しているのです」(Der Mensch ist ja ein Gottesbeweis)という言葉が示すように地上を遊離した形而上的事物ではなく、むしろ人間存在の中心をなす概念だった。Vgl. „Weil wir uns auf dieser Erde nicht ganz zu Hause fühlen.“ Über Gott, Jesus und Christus. Gespräch zwischen Karl-Josef Kuschel und Heinrich Böll. In: *30 Jahre Nobelpreis Heinrich Böll*. A.a.O. S.31-40. Hier S.32

<sup>20</sup> 「私は子供たちが一度も遊ぶことのなかった野原に育つ花だけを買う。」(184)

<sup>21</sup> Paul Tillich: *The Courage to Be*. 2. Auflage. (Yale University Press) 2000. 引用は次の訳書によった。ティリッヒ (大木英夫訳): *生きる勇気* (平凡社) 1995, 285頁参照。

<sup>22</sup> 上掲書, 242頁。

<sup>23</sup> 上掲書, 248頁。

<sup>24</sup> Heinrich Böll: *Ein Tag wie sonst*. A.a.O. S.50.

<sup>25</sup> 「はい、家にもどります」(187)というフレートの言葉でこの物語は閉じられる。ただし草稿には、ケーテの視点からフレートの帰宅を描く最終章(第十四章)が存在していた。Werner Bellmann: *Das literarische Schaffen in den ersten Nachkriegsjahren*. In: *Das Werk Heinrich Bölls. Biographie mit Studien zum Frühwerk*. A.a.O. S.11-30. Hier S.29.

## Über Heinrich Bölls *Und sagte kein einziges Wort*

### Zum Wendepunkt von der unbewohnbaren zur bewohnbaren Welt

Shin Kimoto

Die Studien über Heinrich Böll befinden sich nun im neuen Wandel: Seine Briefe aus der Kriegszeit erschienen im Jahr 2002, was besonders seinen früheren Texten ein Licht wirft: *Briefe aus dem Krieg, 2 Bd. Kiepenheuer u. Witsch, 2002*. Seit demselben Jahr beginnt auch die Herausgabe der ersten historischkritischen Gesamtwerte: *Kölner Ausgabe, Kiepenheuer u. Witsch, 2002-*. Darauf basierend erscheinen jetzt ständig Monographien über ihn. Außer dieser Domäne Germanistik merkt man jedoch im grossen Publikum immer weniger Interesse an diesem Nobelpreisträger für Literatur. Der Grund liegt wohl darin, dass die Szenen wie Kriegsfronten, Nachkriegs- oder Aufschwungszeit, auf denen seine Literatur spielt, von zeitgenössischen Situationen überholt werden. Man soll sich doch fragen, inwieweit der Autor denn an seinen geschilderten Zeitsituationen die Problematik der Moderne, die heute noch herrscht, durchschaut hat. Dieser Blick zur Modernität wird ihm noch mögliches Überleben schenken. Für Prüfstein dazu bietet sich der Roman *Und sagte kein einziges Wort (1953)* an. Er galt damals nach der Veröffentlichung im Publikum einerseits als ein Buch vom „banalen Wohnungsproblem“, über das damals öffentlich viel diskutiert wurde, da hier ein Ehepaar als Hauptpersonen, das wegen ihrer Wohnungsenge getrennt lebt, hervortritt. Andererseits gab es jedoch auch einen Kritiker wie Hans Richter, der dieses Werk mit der Bemerkung „Meisterstück in der Nachkriegsliteratur“ auszeichnete. Die beiden Arten der Einschätzungen, die sich in deren Richtungen zu widersprechen scheinen, überbrückt der Begriff „Wohnen“ bzw. „Heimat.“ In *Frankfurter Vorlesungen* weist Böll darauf hin, dass in der Nachkriegsliteratur der BRD keine einzige bewohnbare Landschaft dargestellt werde, weil die Autoren sie nirgendwo gefunden haben. Die Mission Bölls bestand also darin, in dieser unbewohnbaren Landschaft literarisch bewohnbaren Ort zu schaffen. Der Held Fred findet keinen Ort, wo er sich ruhig fühlen könnte. Er stellt sicherlich eine Figur der „transzendentalen Obdachlosigkeit“ in der Nachkriegssituation dar, die nach Lukacs in *Theorie des Romans* die literarische Moderne kennzeichnen soll. In diesem Romantext setzt sich der Autor also mit der Problematik der Heimatlosigkeit in der Moderne auseinander. Die Heimatlosigkeit, unter der das

Ehepaar Bogner leidet, bestimmt auch strukturell den Aufbau des Romans: Der Text besteht eben aus 13 Kapiteln, in deren geraden der Ehemann Fred und in deren ungeraden Kapiteln die Ehefrau Käte aus der jeweiligen Perspektive für sich hin erzählt. Das macht bei Lesern nachdrücklich den Eindruck von der schmerzlichen Zerrissenheit ihres Ehelebens, das eigentlich unter einem Dach zusammen geführt werden will. Dabei erleidet sie Fred mehr, der aus dem Haus geflohen in der Stadt herumirrt. Der Roman beginnt mit seinem Monolog beim Lohnerhalten am Samstagmittag (1.Kap) und kommt mit seinem Entschluß „nach Hause“ zum Schluß (13Kap). Es geht hier also um den seelischen Vorgang dieses bei einer Kirchenbehörde als Telefonist arbeitenden Mannes von der Heimatlosigkeit zur Heimkehr. Währenddem wartet seine Frau Käte mit ihren drei Kindern ausdauernd zu Hause auf ihren Mann. Im Gegensatz zu ihm erscheint sie fast so wie die alles hinnehmende heilige Mutter, deren Lebensweise allmählich einen positiven Einfluß in der Beziehung zu Mitmenschen auf ihn ausübt. Es soll in diesem Zusammenhang darauf hingewiesen werden, dass das aus dem Romantext entwickelte Radiodrama *Ein Tag wie sonst* in der Urfassung mit dem Titel *Ich begegne meiner Frau* betitelt war. Der Ehemann im Radiotext bekehrt sich also zur lebensaffirmativen Auffassung, damit er an einem „Tag wie sonst“ seiner eignen Frau doch im neuen Licht begegnet. Gefragt nach dem Grund der Heirat gibt der Romanheld Fred die Antwort, „ich war auf der Suche nach jemand, mit dem ich mein Leben lang frühstücken konnte.“ Für ihn stellt seine Frau vor allem „eine großartige Frühstückspartnerin“ dar. In einem gemeinsamen Essen symbolisiert sich meistens bei Böll die menschliche Beziehung. Denn sogar prächtiges Gericht schmeckt in einer peinlichen Lage nicht gut, während eine magere Kost die herzliche Liebe von Anbieter ausdrücken kann. Zu fragen ist darum, was ihn immer noch seiner Familie entfremdet. Die Wohnungsenge ist für ihn nur nach außen hin Probleme. Käte überzeugt ihn darum in einem Hotelzimmer, „es liegt gar nicht an der Wohnung.“ Was ihn an der Heimkehr hindert, ist ja nichts anderes als sein Minderwertigkeitsgefühl, das sich in der Aufschwungsgesellschaft negativ verdoppelt. Denn die Armut lässt sich nicht nur materiell ermessen, sondern vielmehr gesellschaftspsychisch definierbar. In jedem Kapitel des Romans, der in der Vorzeit des Wirtschaftswunders spielt, sind die Geldsachen wie Lohnempfang, Geldausleihe, Mietenzahlen usw. mehrfach dargestellt. Dabei bemerkt man sofort eine merkwürdige Sauberkeit von denen, die ökonomisch überlegen sind: Der Kassierer hat z.B. „die sauberen Hände“ und zählt „die Scheine auf die Marmorplatte.“ Der Vorgesetzte von Fred ist gekennzeichnet mit der „tadellose[n] Weiße

seines Kragens“ und der „Präzision, mit der der violette Rand über die Soutane hinausragt.“ Eine führende Dame in der Kirchengemeinde verfügt in der Wohnung über kostbare „Möbel, an die wöchentlich acht Stunden lang der Schweiß einer Putzfrau verschwendet wird.“ Diese Möbelstücke bezeichnet Käte mit dem Wort: „diese ganz tödliche Sauberkeit.“ Zu dieser sauberen Tödlichkeit trägt wohl das Nivellieren von Substanz zu finanziellen Funktionen wie Arbeiter und Verbraucher, Käufer und Verkäufer, Waren und Abfall, was in der ökonomisch fortschrittenen Gesellschaft fast unvermeidlich vorkommt. Denn die Herabsetzung von Substanz zu Waren muss jenem sozusagen Seinstiefe wegnehmen. Hinter der scheinbaren Sauberkeit verbirgt sich die Fortschrittsdenkweise im Wirtschaftsmilieu, die Fred intuitiv den „Puppen mit ihrem falschen Optimismus“ im Schaufenster anmerkt. Der Optimismus der Warenwelt macht ihm jedoch wegen der Wegnahme jener Seinstiefe die Stadt unbewohnbar: Der Romanheld muss dort nur ziellos umherirren. Trotzdem kann er auch nicht nach Hause kommen, weil ihm das schöne Scheinbild der Stadt eben seine Armut und Familienmisere immer stärker bewußt macht. Er wird folglich mit jedem Schritt „in den tödlichen Kreislauf“ hineingezogen. Nach einer Nacht im Hotelzimmer genießt Fred aber ein gemeinsames Frühstück mit Käte in einer Imbißstube, deren intime Atmosphäre ihnen irgendwie Seinsnahe erfahren läßt. Am Mittag findet er seine Frau in der Stadt wieder. Sie geht mit Blumen in der Hand in die menschenlose Kirche hinein, um für ihre toten Kinder zu beten. Sie bringt ihnen nur Wiesenblumen dar, weil sie immer wieder davon träumt, wie die früh gestorbenen Kinder unschuldig auf Wiesen spielen. Im Grünen ist alles Seiende als solches angenommen, ohne nach irgendeiner Nützlichkeit abgeschätzt zu werden, wie es in ökonomischen Verhältnissen geschehen muss. Vor dem Anblick seiner Frau kommt Fred doch zur Einsicht, dass er auch genauso wie Wiesenblumen auf Erden akzeptiert wurde, und entscheidet sich nach Hause. Man sollte hier Paul Tillich zu Rat ziehen, um seine Entscheidung aus religiöser Hinsicht besser zu verstehen. Der Theologe steht in seinem Buch *The courage to be* den modernen Menschen zur Seite, die verzweifelt dem Nihilismus ausgesetzt sind: „One could say that the courage to be is the courage to accept oneself as accepted in spite of being unacceptable.“ Mit „the courage to be“ gemeint ist nach der deutschen Übersetzung „der Mut zum Sein,“ nämlich das Bejahen des Seins. Fred entdeckte letzten Endes die „Wiesen“ als Heimatsmetapher, wo er als solcher akzeptiert wird, um nach Hause zurückzukommen. Aus dieser Sicht des Seinsbejahens kann doch wohl auch das Scheinbild der Stadt als illusionär durchschaut werden.